医按

三

和書門 類
二〇六三〇 號
五九 函
四 架
五五 冊

内閣文庫
和書 類
二〇六三〇 號
五五 冊
二〇三 函
五 架

内閣文庫		
番號	和 20630	
冊數	55 (4)	
函號	203	25

国立公文書館
National Archives of Japan

林氏蔵書
日本政府図書

空蝉

十六歳　中将

源氏自中川家帰給事

帚木巻の終の詞よりつゝきてかきつゝけたり
とかくて中川より御かへりある趣の事く

同六月比又伴小君宿中河家事

空蝉君与西の方打碁事　西の方伊予守之女也

源氏君垣間見給事

小君引導源氏君令通空蝉君寝所脱置薄衣逃去る

浅草文庫

源氏君人違逢西御方事　西乃君号軒端荻也

源氏取薄衣出給事

老人君見源氏誤少将君事

源氏還二條院送歌出空蝉君返歌事

空蝉　並一　以歌為巻名

うつせみの身をかへてける木のもとに猶
人からのなつかしけれ

巻並事

うつほの物語に第三ニ並春日祭又第五
吹上の巻並（祭の使　菊乃宴）かくてあり又うつほ
松の物語とて物あると並一帖ありと見え
乃例也

箋曰く此松の並よりは大唐日本の事と同時よ

なりしへて書や

凡此句語の並の捩一偏に月の事しとしるし
らて横竪ある故月はしよの事とあるでふ
ところの並しかりられと竪の並といふ之
こそしやとの宣嬰乃来見えられし奥入にも
二乃並といふ是し幕末の次や並といふ座
くとあるも一流よりしやく月乃定 此実にもしらかし
並一幕末 ひとみにゐ きよこめる 二夕かとえりらく
玉蘰乃並る横竪ありひましつれる来

橋姫開巻蓬生は一向横乃並なりとけり
の此語乃並し横しるてしらり濱松の並し
唐と日本との事と月はよかしくてりそる
是も横之凡並の本意は横の義しらへるや
奥入にも横乃義と存られ 中院事
書云 尚書の篇のして横は並の義よれ此之
彼序云以舜典合於堯典益稷合於皐
陶謨盤庚三篇合為一康王之誥合於顧
命 おや從来是は今の並の人よりあしひる

ふや並ハ律迫方并配是不皆あしひな
らずの訓あり　廣韻云并ハ合也又併賦序ニ
并序とかけると菅家説ニハ序とありせ
ならし讀く自余ハならひ序と讀
く是を今の並乃心ニ御ね似ん

花

並乃義ハ先横とみて知らしく作かる句
杯ものや説乃こてし但此物次ようよりて
豎乃並ゑ色あく　あしくは一まてふかく
事と末とまらしてあまてしけせる

ましく又一巻乃中ニ横豎と〇ふすなり
末摘花の巻ハみしめハ前豎同時の事
とよみて末ニハわか豎しり後の事也
も毎帖く定蜻蛉乃巻ち豎の並なり
并とゆりて知らせり

并

並ニ三乃様あり此事ハ豎の並く帯木
巻のほしまなく凡並とする事河海ニ見る
みえたり

下　秘

并ノ義ニ同し物して並の事　史記ニ

本記乃外ニ列傳とてもろ〳〵附ニ用しら
ろへきれ
箋曰並ニ横竪乃ゆゑの事河海ニ委し
めて此ら見ゆり源氏ハすへの物語ノ竪ニも
皆横ノ同時となしつへくと横とよひ名
別乃年紀おもひ竪と云竪ノ紀意
ハ横や
△横竪事 天台本書玄義ノ中一ニ云私謂
実相之法ハ横ニ破ス凡夫之四執(シウ)竪ニ破ス三聖(ジヤウ)之
證得
箋曰横竪之説依之知るへし
私云 史記ノ本紀世家列傳なとに准擬と
なる事桐壺乃巻ニ注し畢 抑本紀
ハ帝皇の次第年紀としてしるし
物かたり世家ハ其家ハ代々世ゝよりすと云義之
代ともからる此人ともいふ此物語ハ宇
治十帖ハ浮舟ハ八宮乃事より姫君た
ちの事まてとしる其より列傳也
一人〳〵乃ことくとしるして傳記なる此事又

関屋乃巻ハ空蝉君の別傳之 末摘花巻
蓬生巻ハ蓬生乃巻の別傳く前後
乃紀の混乱せるハ其人乃よく見の
わくすとなし出給へ乃関屋の巻を
始よ放浪くるれをせ給しハ乃ゆるし
ぬしいふうハさくうく此や紀ハ史記の
杜もけと模しくうし紀う見し
るやうまんされハもろしころよかるへし
此等 王充論衡くのへし

箒木追加
箒木の巻をとふ
帚木の巻に
君ハとふとも
箒木の名ハ
うつうけ
なかうくふさ
此紀ハう出さる

箒木の巻の名ハいまし に
帚木ハくさき乃巻のとうり乃詞よ借く
けふくうとう中川の宿よと宿りぬく
の衰乃事く 秘 義ふ同し
義曰けふくの巻乃末とうきまれらし
て川分てうけしう空蝉の別傳と
ろんでしもめくはうく中川乃方た
うく乃事とは皆此巻ニうく見ると
らら其末の末しうしめくハ屋

毎家に彼巻はのまり不作らめなるの事
くりしてくひとるとは板りいふ
ゑてうちとるくしらく

閑云 帚木の始よハ桐壺乃末り光
君といふ名ハといふ詞ともとく光源
氏名のことしくしし書出せ
了此巻と前の巻ハ末ともありく
る月執や
我ちくへよにくまれて世なしらぬ

さ

弄 源氏是好色のよしみしらう
秘 源氏の好色と自讃しのよみかう
う津とみかしのやうし源氏よ作と
けまん人ハあれしや
箋曰源氏是のまれよつきかまん人か
といかまよの自讃よハいかしらと小君と
ろつしやんとれて見え
源ちく

小君く
いとうれしく
源乃人 義 寂苦しやゝゝといひ
たゝる心なうくし
てゐくりのほうく
小君か空蝉君ふしく候るや
りかうらよかくはしひ
やうみなきなおもとあてえうえても
いしして真実めて申しくはしくしく

かくとや
といのやうしても
義曰小君とおとのしゝくとおひしゝぬ
まこ路いとこく何となと纏（テトフ）字く
あの子ハいとたしく
小君心中や
女と
空蝉なり
なみしくおしく

一 美濃にかしこく善道の人をもとむるね
まへにいやすことはあらし空蝉の
うち知や
佐りて何まをかくる
[美] 空蝉の人柄ハ源氏にまし清書信
かしこくも不孫なるへし
[秘] 空蝉の心ハいふへくもあらぬに
志るくいにしへ見ゆるにハ
此方とく人のこころかしこきのこと

さしてハ人をあくかくせてあるく
し乾福よりてそめてし
風いまはかくしつかなる波路や更かなる
ことき時なかなり荒角なりひきとりても
らし本ハ貞女よそしけハ女しにしら
めしハよき時なしそしく
こ多かりけれ
空蝉の心中にはふかき思ひしも名
行めるく是又貞心乃まことれなれ

国立公文書館
National Archives of Japan

なるべし
花鳥云座そはまかくてし
空蝉君の源氏よりしひまなひろぬるは
知らりしのにくは一段の行なりハいひた
ほつるかを須なりけるよハ二条院出
東院よりけるひしるとまうしたもし
おもしろかるべし
義曰は羽こと花鳥よとらめて中川乃
宿つての方違ハ下部等実意なるべし

実香雖知く守く注く光行内方乃
説く断也俊乃異とうしかる経へる
とらく
秘云かりてそらめてししはまし帯せす
やこの縁なしとも子細けりきやうにの
くに我身ハはまれくてそくしと三よ
猶よや
君ハ人はみなしし
源乃宮蝉とりひぬ心く

こ君よいはらうと

又小君は源のしくしひゆく

られく

悩哉 懐哉 以上 日本紀

心かしとさるらん

源の人はと思うをぬく

ぬくれく

将計 或 方便

かくあしきにても

よろつかしめ思はつかへ給

うれしくさひて小君かむくへき

う風情や

こ乃くに國よろしり

比浮雲へかるや

義住雲よ物むしく

ぬくら

どこの万葉よい思ふとかりことの

ふくむら川をや万葉よ風乃芸

とかりされと風とともにちるらんや
私云　紀寄か宿乃こゝ海く
少庭このみちさくしきれる
奥入作
一万やうノ
少やこはたゝしくしきれる
まかせこそれはにとらん
秘　義ホ川字ことよくはとらく思河く
うつく
わか車して
義　網代車なるへし今の世乃板輿（イタゴシ）の

唯樓よく女房乃家ねや
めてゐてよけ子
いさそて之将の字の心れ道遙記自筆
我よハ　名の字と申し子
三乃子とかされれ子と
源氏の心小君乃たゝかうとうらまよね
れそて御やらしくおやさうく
うけかさとうつ
関白作云
かくへし
えのゝむましうけるは
源の小君のこらへおやししれたかし

おもしえおこせてはあふましくおや
しいしらなし之
人えぬるゝ
義 此西の方之次の間より東乃はま戸
とあり此寝殿乃掛金を明く
しんとはもてえらくし
その女人おはしらしにいと
と乃井人は妻おしくて若之それとは
そのおもれわれはめにもそぬく

我はみなしごの
小君の内へ入おり
こよひはいかにつきと
義 御こゝらは女房達之小君乃入よは
化とらしぬとおもりに人やみえしとて
しとや
おもうつり何きに
小君はそよく何しはおりとりつるにき
てなせよはおしし「ちしたちそれ

いとおそくつみや
紀守しりかしの事なれ
伊予介の女といへ蝉のまゝ子や藤人かね
乃書よかけり形鏡乃萩とひし人之
本しのれとしつゝよ待ちて懐抄よ見
しよゆり
源人乃家西の方よ行かれるよや
公家の西よ行かりて見ゆるよしや
閑古空蝉乃ねりし方より西に家

まへし
箋日公家中川乃宿より西よ行かれ
る也とく
同少も伊予介の本邸は公中川の宿より
西よあかれるく
抄云只今源の乗ひより紀宿も中川
やあよ紀伊守国よかゝりしくして
乃とやうからしのまことなるしめ乃
方違の時西たゆて小う人て候らん

かゝる人おほくあつまりは軒はの荻ハ中川
の宿の西面に侍へしを夜源氏のう
たゝねしつゝよ物語せしを聞かと
軒はの荻ハ母とに合ゐつゝれぬ
まこれよりて西の君とよはれ空蝉ハ
りうつる東の西よりまかれしうつゆ
これよりて西君と云ふ事もなし
給ふし

碁うちせ給ふとて

作

博物志 堯造圍碁 音期字亦作碁 此間云五 一云
舜造之
晋中興書云 圍碁ハ堯舜以テ教フ愚子ニ也

関古ららに碁の事とうち出ては源よ
んとりよいまをきうつ事もしろめ
の源よりりつくしうつなきりし碁
かし精の入ものなくかしとこそいふ
あきれやうの事とこそしかなき
これとし何かの空蝉も碁にこそ
ありなん碁盤の上もやれ端
の様く碁将の所しらやしく
ふんとけはれや

そでひぢかくし
源の碁をうちふとやすてみゆる日
路く
むろ入はうらうし
小君のくるまのしつまて入ぬとうる
うらしや
みしる海よめとし
よつこの方しうちらひてあのうら
へ入路く　秘箋同く

うらけて
木下のうちひしとうらからけてかく
ふや
火らうし
火の道まで又ハ切灯臺まく　切灯
庵とたとかへるのしくしと
しまう
我心うしふし
室蛍く

ちまたゆくやそのひとへうるゝ。

行
こゝろ錢は紅の色に見えし上にきえてゆく
らゆくは今ひらりと白うしてやの
知らへるゝ。よ二行めのこゝろあやまり
初の萩
何の出生かとられして衣のこゝろ
コマヽ
のいとかけしまよ人声にさめるとて
了知たりやれしらよ也くみて
そうにえてんとあるも月見ゆる
しとりいふしてくゆかにしくら

めしくとたかめくし
花
女房の営造五月ぬかしりそひしくへら
ヨウゾク
うれしとうろ知しくかてけとひ待りけ
そゝ。しうやくは付はうしにひしくへとうると
らかよへにうかしらたの事やこき葉
よそめしるへし汗海よ紅乃色こそと
しつれよとしいうとみてゆり
拝
花るこれてしらり
秘
花の流通へし葉なるへし

義曰也説よしい称りうる○しと云物の
事也
何にかりしくしくよこ多て
ひとくかなる○のしくようつるとさるらんし
一説謙義又説あり但かりけよ不分明
いかにかとりつるへ
秘 云くなる○のしくようかきとらると云
説かれとも只かりとかみえてしまりぬく
義曰只灯下彷彿(ホノカナル)と云衣服(イフク)不見(ミエス)

扇(ワキ三ヘ) 義西説之
かけとわるしけしもしらい
秘 空蝉の用意かする秘く 義曰く
○はうの座せしまて
是とかけ蝉の秘く
秘 碁とくつよへ○かうしいかりるへきとと
しを程かひまうくもく用意けるう
らぬまほく 義曰く
いまひうりハ

秘
秋くの萩之ゑけるの方しらうらわかし
よ東山ちかきたにしらのこる不かしくさと
代されぬへし
うすいろのこゝろあり
秘
二藍之　うす色といふ月まて
何と花なる色二色してゝしるしと云
萎同く　年よりて浅深何ことし
鼻同く
紅白二何井の浅深は若年よりは赤花

かりく青花とてわれし次第り　青花
おほく赤色ともかくして深るや
ほよ赤花のをかしとみえぬ程かるか
花田かしいふ多く
おいゞしつよられして
秋乃萩の衣裳かしとも、ひきはく
うらは基ふん入しる絆かうしく
さるへし
くれなゐ井のうし川中人哉

河傍腰く

或抄河説紅のうしと句ところて川

ゆへあまきハまてとしもしらしと云義

よ反しきれ又紅のうしハ竟ときの裏

乃事れ云し

箋曰河ノ説よし

ろうそくのか

河傍側（ハウソク／カタハラ）くわしハかほんとうちのかつ語

云ようる人も物ましひしぬりのかう

されとこゝやうにやうそくのゆとかつしと

とこく

旧説ニ傍側（ハウソク／カタハラソハナリ）と云人しゆきといふしゆとお

わしゆり飽足（ハウソク／アキタルヽ）の二字のいひ十へうた

やゆきつしかうりつかたるんかる人

し蜻蛉乃事なと此記ゆり見合て

料簡よくし太うるハわろし

かれぬんてそうり河海よ傍側と

られてゆゝかれるんとゆ人せうらかねつら

なし

新
見花鳥

秘
何は傍側にして花よりは飽迄かはりのなかり
けしきかはらすかけるんにて
これにも傍側打ちまぜ傍若無人
の心なるべきこれにしる所かまはぬなる
負し

義曰 ほしきく何とは傍側打ちかへしかへり
ゑんにし花は飽迄 わさかしくかへしたる人とにと

師説 何の説にて強みし 傍若無人の心
してた恨みなるまじきにして 傍側
何ノ声(シヤウ)如此 使上ノ字隔てにしたし
問云 傍側のしるしくなる正称
なしぬんやにし
そうなれは
何夾スルトく すくしくしるこ
義曰 思量なる心にて
秘 せいなにとこ
しるくやうかけるく 新 同し

海人

同見之

何らく

下(河)陽く　勅文　皇式アリ假名紀みと

以詞あり混(かうし)墓(こか)や識ときやうり

くとけりいかとも發の事く

さつ(弁)きと修さ海くとの字濁　紙　又云

君のかつく同公也

さりつとうさ海く　義　さりつく何らう

海うさ海く云し　以外何ツ之なり

私云さらつくハ下陽くさらつとは不や

何らつくハさらさ海や　君乃かつく

られよ同しさらう何まの義なるいく

乃字とみてしむへしめす

祢らけしる不可く

お(秘)しまし不かさく

義関云云　祢ひさしら不かさく

むへしとかやう

何国　国字　漢書　語

源乃むらにもとよりおもしはけく
しけこふてえつらんく説の字ノ心よりつ
しきれ　秘　作ふ分乃心よい法ふ従へ
こと女ゝ思乃人よの源乃え給んく
関けよりともこれにしそしてふんく
むらを和もろつかたる事と
新　人の性とおもしてつらう行く
秘　人いえつ伝よりい用きくしよりしかく

いくもかこうられしきてうやしし行
くししろけともくとゑとかう
人乃性のとしへく
かつ
こなおあんをまし
秘　義関云　菓子の評く
一うしとかけてきやしまいかまくこれともして
しうれとく
関云云一うしはうしと云んと一るかしうきよい
わかぬとうみや

私云物よむこの何ぶにもわすれぬ事と
いふ心也
けちえすまじう
囲碁結（ケチ）く　又闕（ケチ）く
けちみてしくるしめ所く闕
義曰闕は目とをん心く結はるゝ
心く闕云目く
わけよ
心痩く　心もやせや

何そけく
早速（ハヤク トク）く　いそうしくめさいしき
術や
たく乃人は
此時源氏君の心は海人は京乃妻戸
しりぬるをよるやまかへる舟屋の柱
しうくめる人を空蝉君のかりいま
記りは京へしもう浮躰しのこ
ま何くをむかうの方といふ御の東

しかられて毎度の柱くられよみてくは
いあへむきことはいしろてはうらみ
へし西ハ奥乃しるかれしむしよりしき
とそうてかくの人といはれるく西にも
れ方ハ奥よ右ゆれとかうりにきゆ子
いうしのしく人むさきうる執かえ人し
弄
奥乃しにむ人子人さし一緒位か事
又有子細
秘
かくの人ハ宮蝉之在家乃奥成へし

花るの義不審なり
義ノ義同し
関むしほとみハはしのきかれとも
居やしの奥のやしよきゆるくそらむ
いそかしるゆへくさし
らふしそかしめ
花
らの地之　又物しりよんく
義物右一郷れ　弄同し
秘一変によ度する事え　秘　義に同し

こゝろとこそ
劫や
一劫二劫ノ劫ノ字ハとび尾とりや
しんかう
義曰此義叶つりせめかひかけの時に
一つとのりえしゆゑ他所へサテといや
して居ところくる事にすと
云や
いてはかひいもけよあり

秘
移しの萩乃月
それハ浪とかこんく
義 移し乃萩のまけや此ましへハ指く
も
とみの木つく
義曰いもとうこ同しぬ角こうしもは
へてみえこや
とひとうめてうとくこくそそうす
十本爪早く 請君屈指数

いよのゆけたと

奥入 いよの湯のゆけたはいくつといふことはしられ
かずへしらず君そしるらし

拾 いよのゆの桁はいくつといさしらずや
かずへもやかずへしらずやそしや君
そしるらん　雑藝　伊予湯

温泉記曰し　君そ豫州にいきしに
乃後の湖中にありて湯乃けたかず
きられしらぬ七かずに　七十七段也

風土記　けたの数五百三十九段となり

素寂説

花 六花集に古哥として出せり　いよの
湯のゆけたのかずは左八右は九中は
十六として有之とあり
哥よみかへしはまだしらぬ事にて也　雑藝
又素寂が説にはゆけたの数五百有
九とあり是らの説もわかれし
路次にていよの湯治の時分に

ありしつくらきゆかしかりし
或説 伊予國いとの後よ山より海中へ
出たる温泉あり これ湯の樹 ともいふし
かの湯やまうしくしるけくあかりけり人
ことにや十月しに神ある神人
ありふるかりの異玄いよの中のゆきゆる
いひけえそゝてぬ九九つ右ゝ八け
中へ十六やきゝそしくりとし
うらひて酒宴へ下を兎くめるあり

とらく
義曰 何花ノ義 皆これとのゝ 明くせむ
萩同筆ノ横所その人よ何いふかや
不しるりとて分ぬとしらう母しくへく
伊予の湯の中をしくに至しらとや
らくへともあひし雑藝吾のよはい母母
とられいそつし志るへみとく
とらし志れとられしり
義曰しうけの後は空蟬して海より

ゆゑして只りてかしらのあらはれり
人乃敬肝心ノ詞也
かやうれしさのこやうなりける海とかや
しめなましや
なし入れく
(弁)空蟬の称也　秘同じ　義同じ
めとしはしつきされく
空蟬ハ程くれよ口かひかしした
ゐる海河しりたる中へくともあら称し

深の浦さんとつき路也くノ月並ニ
し月乃くつき都くのさゆる之
めすこうしられしける
(何)月の上腕しる積也　法則ニ　称ひしまて
しわり
一説ニ晴てれひくい海られんれなし
山家の中やまわり
(弁)腑しるやうし
一涯ひくい海ふくれくししる海

としむて然

（抄）瞎しろく詠しいたらわろく又ハ目乃との
あつまりとらく此義て然しらし
義曰盲義ノ内目にしかなるを用へし
らく

ろかれとも祢ひきて
（弁）鼻かしもしとし看ぬしや　抄同し
義曰漢高祖ッ隆（リウ）準（シユン）ト鼻（ハナ）ヲタカナリト
ホメタリ　纔ニテ　鼻（ビ）高（カウ）脩（シユ）しや直（チヨク）トイヘリ

鼻ヲタカナラヌハほめぬしらや惣別
しけとみハしらちられぬ人く
関六祢びきハしかれハらし祥ん
祢ひ礼ハ寝（ヨ）所（ツコ）のんくらし
ひとりきは
（弁）宣婦ハよりしぬしらかれしと遥かし
ぬりてかしよしくらやく老又人の
かしへし　抄同し
ゆてはけらく

義 ふるさめよかしらとはうしつつとい
うひとへに余所の人も用意心ある母
とらんしつつ
このゆうされるんしらハ
花
西乃内方の事やしらぬる所ハ梅され
ふやうく
秘
しらつハ守蝶しらハ梅されるく
弄
見花
義 曰まされるしられとこまる所こ

ことこふえし
小花のしく
弄
郭との萩事く　秘 月く
うれるとは
行
ゐりふれしるや　俵成つ女流ほこう
する心く
義 年浙にかしそとゆ　やよ
じや
時しに

これとて一しほあはれ源ノ思ひ給
なり
御めかしみえ給ふさまなれ人は
源心也
秘
源氏よみえたまふ人は大略 知ぬ
義中云く
草子の地之
源乃実あり
ねやへいも
しれ給ふし
らそくらう
へしく
はくらひしるとのさえ給ひてうやうしょ
しらしとてけ人といはまえなし
給事はかれ様よ今はあらそ御心絶
はるしくさ給之
義同し

くいまさなしは
所
視其私屏 日本紀 垣間見 万葉 闚
作者也詞
古今名所
作者也詞云そのしたにいとなまめいたる
女はらからすみけり男かいまみてけり
けりと云うそれひまよりみたるなり
いとなしかりし
男出やしよ源のくつしく心源とまよ
なりにけりとみ行くの萩のこゝめまは

いとかしこき事ハ源の氏かしら思ひ
ましく
二君おしはからるれて
（秘）小君かおもてもし私乃られてもちの
うれしく
まろ殿のうちくらよ
箋曰宛若しうこのましい両よ存也し
かりしと小君にとりのまく　（秘）同く
いとうしきかし

（秘）小君の心く
箋曰卿（ヒラこ）余乃所存所と小君ノ心ノ
恐ましてや
まいらぬ人ゆりて
（花）みしのかろうとして　小君か詞
箋いはけなき事のあつてみくさう
かりか中く
そてこそひめや
源乃詞く

かくてハ
小君ちかくふしてかくてハと句ひとつてん
ふかゝり
わかきよくかるあねかし
引く乃萩のとろしきつゝとや
何とかひしけへきに
義曰源ノ心ニ小君かやりけるへきれ
空て蝉と納得せし推量
まつて

物乃心ハえけへよ
小君かうれはきこととかやうし乃下ノ分
別ともきこえもつしかうるまもしてハ
かうしも言め物しられと源ノ心と
えけしてけれ詞や
わか君ハつらふ
花 つらう乃詞く
秘 小君と官女のつきかり
聞云若君とし　但君の心れらく

こ乃みうしハ
小君乃出入ノ所也
しれもさゝぬなり
箋曰各寝室ろうしるや
しはさゝぬなり　いそうくしらハされ
この程つきて源ノ詞や
こ乃子もいりうしのんハ
弄ノ小君ノ口状として源ハ聞く空蝉り
いひかへしうしもかいしめすなり

されとも空蝉乃心ち善通ニありし客
のいい合らへき様ともかなく只門入事
らんとも小君ともしくしうやとゝ又ぬ
ともつく
此子とも小君もしこととしる時分とこく
くらし
箋し統別箋なり
このかるのいりしとも
折くの萩とられくよあるゝれそう也

ふし源ノ小君よの給へ
いそうこハ侍らし
小君ノ詞也へそこうやうふのうくよい
ゆるしといふや
侍りし
源の詞ちやうよ何ゆるししやむと小君へ
乃ち答へ
これとをし
源ノ心へ

義曰しくらい侮こそしゆ依やてをとらし
くちをすゑくこれしとみへしうらしいの
ぬちぬへ用捨や
こゞこハはましく
今度　日本紀ノ息へ
これやけらみの日記よとめ出来て
假名のうき様之文出ひしとあり
おいうしと存ハ書ニしり入へし
此乃侍りしらよ侮らハ孫侍らん風

吹しとせ
何宿
風あけハ人まつひて戸ハさし
何者しと君にいひてしかハ
義曰源しくぬへまて使にさせて下の人
ハ源とたひきゝしものしくゝく
あしこひろけて
卑
屛風しや次間よろ　秘目く
義曰屛風くしゝのしせて人あるまふ
しつ水く源とこちひしゝめく

とくれらはるましつへと
戸のけしきとこからつるまてハこ
うねるよ入て
系ノひさしふ杯しる人てノ方へ行て
めつく
こゝうそう杯して
少云小君ノ杯へしるさ傍してゐ
しうかく
大何しきめしゞに

義関云おしゑゝみはつもるらしハ只と
いふらし火あかくて人乃みるらしく
小若のしそかゆしらるへく
風とらはとさてまてる
秘 やとしの詞ハふけるまてハ風らかはは
めなるへし奥乃詞しやとした
ら出てとめつ山里にゐの詞 松は
し
いらうところ身しれ

秘 かほけるく思ひは源氏のはめりら
ひ思ゐやりみろきく
むこうけて
義関云名ハけわもてやゝれとを
けの字を渡てしハ借にとし
隠てもしへし
やとし入船と
頼小思ひやらなるく前ニ同し
義曰源の用云法か思ひやるとと

秋深く物さひしけなれく哀ふかく人ある
様なるへく
色はつれなくもし
弁
優にや哀めしおよふ哀人ようしらる色
し
秘
月へく
義曰深ノ月色ノ優ニ物やつしうくれる
らめつゝてそれといふよいうつれるなり
面白けく
女あさくを

秘
空蟬ハ心うつ此様深ノあき給めるをやへ
いれしれ思へしまし又深きそらしこ
そしてまゐらしや
心とけしろいつに様ゆかれ
竹
君ゝつる後乃しゝ気乃夜ハ心しを
しふやハ様しふ
いふハかなめしかハ様ちめしらかれく
竹
櫻花ゆかふれゆしう露けきくこゝろ
めと物は思ふかをへし

業平ノ心ニ叶ヘリ　道徳云集云

女哥く
しる人ハさめのうハなりかめよくしうされ毎

まハこれめさいしかりける

此哥始終を心得ていとうしくハ面白く

秘　義此哥ミノ川

義少源の中となすうとしくしろく　ねたよく

これもと
いは内哥ハ
めをもしみる
とりふんれ

春なしぬこゑのめと

おノ哥ノ詞とりてとろ毒なりしぬ

にいくしろ本面白し

巻しらは家君

野との萩く　義関小君乃こしひ

本しらぬ宮螢の面宮よ思ひては人

とをめて称うをしろめくし

いまめしく

義関とうしいなしろ車かれハしめりもよひ　下ひ

まろ人ハ何ん心なしく

萩之　義関是して宮螢乃うやし

くさひて月心しくらんハきらしくら

萩にかけしをりは夜に行かりまつれと
人あとはんとまへし
しあけるひの
秘 深乃思ひ入るよしるべく　義円く
かやりけるに
秘 空蝉く
あはれしく可有して
空蝉の心
らうそて てく 打歎しさしくつゝてにもの

空蝉ノ帳ノ外トへにひとくれにほかり
にひとつのしをりは
花 あれまてハ空蝉ノひとりつしるき
とるまよくもめけしるとこちり給ハ
ぬ程かり
ゆくのをりよかうさハしりそ
けりしけくひとりハ
秘 空蝉しつともつしむしれ思給
かりし形にの萩にハかりしとりし

ささく　義同し
いろしれなきは
萩之おにいさしほしつきしらくし
しあり
（秘）空蝉にハかくろゝるゝ之
風しくえ阿りつしぬて
（秘）空蝉よあしつるよしとえうる地ん路
や　義同し
心風ましくれと

源ノ心
人さくとあしりて
（秘）人なく人のやうにいミれし給ぬや
あやしと
取くの萩の不審くりへまく
かいの人と
平定の人く空蝉とさしてつとや
（秘）られ給我方としみくそめほん
おしとこ人とくのやうかして空

螺と為てとかうんハうへりてところ西
しうんおもく
かのとしうはる
箋　秘に　同し
秘
碁しらし時尺のしる西かるハそれ
とゆくしすかほとく
まつされん何さく
秘
菓子池く　箋同く
箋関しくたかしうつるハ人あるきとく

風しくめさらんて
萩く
いさかしたらしいとかし
萩の人何さおさ海かるくし
何く山と思ひ海さくれ
めくらいゆようさゆく
秘
まさ世ととしぬ人乃さ西よハ何るさ
兄しるく
箋曰萩乃さ海世中とさぬくしく

と思ひなしつるらん
まれしもてなし
秘 源ノ心とめよハ我もてなせんしてよ
しるへよと行くの萩に空蝉心さし
のいるにしてハかれにしともてなせん
とめふありつし給く空蝉ノしのかに
ほとしくもつ雨ともかしめると
給く
義 源ノ心弟一つよハ誰やらんの様り

かて給へりれとも空蝉のあめめはたかりて
給よ源しもてなせ給く
ありにもあり給と
車の程かしぬく
あのはしまく人
空蝉く
こはを給しつ後と
秘 或ノ心方遠とも行くの萩へのかんさ
ーしついかし 給く 空蝉後 中

うるはしとはうるはしくかくしつけ
いかにもけのなく
ゐしゝ人は
義曰様行してとなそれしきんを
我身の人のまかりぬるは分なる
へまく　秘曰　義同分別の中
きこは人は空蝉への方かなしとな
そてんえしするる萩くいもしるんわ
るかへと見てしるたゝしゝ人とは

さしはなかるゝ兄女へ分別して
見る人は非董とくまく見くられはららむ
こそはかなこそはるとみえしるて源
乃御しらしましにんえしるかへし
ふうしはうけまてし
秘 萩乃ゝ海と源ノ思ふ如く
花のゝまとそれ
秘 空蝉くられりしらんく
あやにくよ

秘 うにもくまとされ給ハぬ也
義 公ハしらる、故ニ源をこひしくし給
ふしや
この人も
秘 義く
人こそ〳〵任事ならと
秘 源ノ我〳〵の義よの給ふく
義 源ノ義ニいひまさせ給ひや
是ハ我〳〵乃義の心ニ通してら

きこしめしにたる給ふ詞や
弟なりし人まと
秘 源ノ我弟とわか弟ともせぬしや
義曰 真実よれの心ならて思しぬ故ニ此様
てうし給ふや
又傍へこ人とも
秘 かや兄かしもと我よいゆるしし世乃
給く
とれて思ふ給へよれし

されとこゝろしなしくる詞や
かはくし
付 みゆきの事ニかとくしき人のきゝ
こゝとはりかは人の心はいふゝ俤しも
よしぬんれ 蜻蛉日記ニかくとしくし
さるはしてらうけてしらつなといそう
ちときゝらしくかる行とあん
花 かはくしきふよのつまかとさうりに
よしぬんかりかくしかと人とよの

一
つ孫乃人とつふく
秘 俤しらくの心れ 眞ニや
義曰三義共ニ叶ふはことしくめり
うらしとれ給くむかしの人の奥と
かなよ對して應機 説法く
人のたのひゆしもしんれ
秘 初しの萩ノ用く
きしとかくいふ
義曰萩乃人とらい奥しかくるゆかり

直衣ノ袖は随してしく分別すへし
隔し
かくての人は
秘 源ノ詞
ひらいきたうく人
秘 小君之　　私 童殿上しならはれし人を云
もしあやしく
源ノ詞とかくわくめてかしてあまりに薪
よとしへの絹之

ぬすみくしけり
竹 興風集云 女のうぬとらて帰つく
くもして
あふまてのしるしみせて給ふけ先
後しりしらてもらいかつもう　らし
しるい　すつうしらうく
秘 蜉蝣のうぬくらぼしいとくはかし
しるく　義同し
私云これよりて蜉蝣の命あり

山公人と守蜂君といふ
うし飼めらう
秘 人にけていはしるゝ悔之 義同く
心よりおこり思ひつ移しる故ゝ恋にそき
行けるらく
花とはかちらんとし忘して
義曰花老の移ゆいそしきかれいく
行ぐろつくし
こゝろくしきかとつふ類ん

まろうしんそて
秘 小君の思ふ心かり源とぐしありて
出る故く
義曰小君ノ失心さるく
うらうとつよ
小君のまれそし及ばまさるく
夜中ふうはかう
弄 さしりて小君と仍しまつふれ
私云 弄の義ふ寓

はしりて
秘 さしうらてかり
美月く切ちかりしてくらし
とゞめへく
かゝ西へ東く花しるこゝろのまく
はなくて
秘 小君の心
美月く
あしき
秘 くうしくと何しとし蓉るく
美月く

花月く
君はとしいく
小君の源とさゝくへとしいてうしてん
としゝひるく
人のうけの
源と花しるこゝろのうけゝるく
又たゝ千かれぬを
源のうけとふしえてつくく
秘 此女のしとうし回て又民アのかりしかり

きこゆと自問自答也　花には少輔ノ
おとしにけりなとかこつめく　義同し
河 侍者(シモト)　白氏文集　御許(シモト)　新楽府
遊仙窟云　従渠(ショウキョ)(シモト)　渠　汝(ナンヂ)之　你之(ナンヂ)
花 たゝ人の源氏君とはいはまほしきと問て
これしるしひかりしに少輔君
御房にて何事かときこゆれはかう
といはんあやまりしらてかけさる
女房かれに源氏とそれと思へし

小君か姉の君とうたよつまとてあり
くるしと思しるくたりとは御房なりし
よかりしは いましく今をかしひあり
かしとは小君かいゑよ少輔のかりその
なけれひしく成ぬへしとあり
いよく
竹 義大概 いよひかたきやしみ物まて
あるをたりし祖のうはしてそまゝを
あるへし　和泉式部か童名を御許(シモト)

九(こゝ)ところにいひきる
あけらるといふ
これまてハ先ころくらの紂しとけるに
ハゆゑとこれといふへく
さけとりある人の
義利に用し
とけたる(秘)として常に人よまうつる
人く　民アか物のたりとめるへく
以紂章子のせん

これとはる孫て
別(行)　行別の人くはるまつる孫とは
なり
民(秘)アのたりとはまてはつくし
思よく
いゑくいま
以(秘)民アノありしのせいかしに只今り
小君のなるくおしや常に花人乃い
ふまーや

いとう
小君の出る戸しらむ人も出るく
まひしれと
義小君迷惑しうるくこといかや
くれなら竹へれく
源氏君く　私源ノ立くれ給く
うおもりし
いたりしいむ人や
源氏ノ乃おもひしそひてやまふ

いよ
おりしこしひは
老人ハ源氏と小侍君しとあるてさし
しりておもしろうあるく
えぬまましく
隠忍しこうく
いへともそて
おりしのあるりとしとうそて何かとしける
くといひていさるいめるく

秘同く
いまゝこゝし
今又底にてかゝりしんく
からうして
秘
源ノはこてまふ出すまふく　しりつしてい
まことにはは若菜しつる心く
これはりうは
秘
草子地く
たゝほしこうりぬ

弄
心うへこ車く　箋　作者ノ批判く
小君は車のとりうして　車には後乃方とよ
ゆりて乃ふ心人よこれ可家ニ家
とれ閨しうにめうく紀しう乃れ去
まう乃こうりのふや閨のうる
いなく人のうるく
わりさ海のしあひて
小君まうしいのさ海と源ノしうき
のふく

かられ給へりし

箋 小君か事とゐ給へく

何ごとも給て

箋 あさむかへ船しかんかり

秘 同し

それ人の心

箋 空蝉く

いてかしらてわときこえん

秘 小君か兄なんく

箋 同し

源の御心中とてかしく小君の

こよく

いつかうかくこ給へ承めれて身ともく

かりひそぬ

秘 源詞く

細云いとみてとてからし

箋 同し

心ほそかしと思ひての給とつよ

まて給しけて源ノ詞とみへし

関云いてかしりてとしよから

かとらく思ひよらてぬしいふまてと
小君か心中にも見しらす事あり、いはゆる
うしろみなからけしきのまみと源
の御心ふかく云給ひて小君とともに
ましくかへらさ申しきと察して
かとらく云ふさて公義めて思ふの
義なるへし
いもの命よとそしける
源の我身はいよの命よりはとそしる

よしや
まことにこうつゝとはとらに
秘
うつゝの字も面白し
何これはしくけまて
秘
空蝉の心はまめし様小君とともに
いかなるゆくとるつましくとや
はや我ゆりにて
うつせみのはるき人よしや始終え
思ひくつましけれと小君の事と

涼しの如く
よびしこゑひゞきあり
小君心く
さしくなる
まさとれ又まんなのぬく さしりけり
何して只今汁りなよへあみ
まいなしぬんや
右源
さり蝉の声ともてたる木乃もとより
竹人りしのおつしきられ

寒蝉ハ 蟺く 文選ニ 蝉蛻とあり
夜めぐるとくしりく衣ニぬきて
なりて一説ニハ打聲蝉ともなり蝉
の名聲ともけよ侶しり如く
ねらへて秋のたかうくしらして蝉乃
むかしき恋を家ちてされ
蝉乃ものけるくと声とりしそに
人りしハ蝉のうしにかせてる如り
師説云 万葉第十一中大兄三山歌ニ

虚蝉毛嬬乎相格良思吾こし
りぬやにいつよりかはりこしぬく
義曰此哥ハ蜉蝣のゆく
相云比賤 阿菟ノ毎義ハ下悉義 二
これとめるに比喩阮といへるハ擬捫
し義之万葉乃心をもあけしかの
うたをかしこんくせりし香
又人字之はらし義く
哥乃心をいつしく

やくらつよ川入て
小君かしりくぬや
我乃人も
花
みしのけるや 秋 華回く
きくにかわしくして
形るの荻よろれこれ心乃とゆかぬと
又付蝶へ乃心かしるいつくけると
とくらりてく
人にさめか

竹
人香く
身ちかくならしして
身ようれ別るなく
こ君しこたに
竹をみれしくけるらく
あさ陶しうすしふとくまた猶しかいし
てと
秘
やまし乃事はすゐり陶うらいらへき
身をかし源をくりて小君迄

ふたゝれしと見えし見えし松しられ
へおしし空蝉乃いふめくけりしむ
ふく
此間いふうすましふやうやう所あり
いさ陶しりしゝふとしく陶さらいは
してりしハ軒へ乃れんうしなくう
いうひハわくの荻しいうひ給つり
これしはとみへ乃れんうしまゐらせ
荻へ乃れんうしゝし人のきりてともみら

いかはかりしたふは程へしぬ事なれ
いんの思ひ人事やうくはみつりや
こゝろかきとい人なれ
けいいに
小君のやしなふまと一旦は源のうれ
しくおほゆとも却而なかしきぬ
へきなりとて小君とも蝉の
くらしはや
記のみちにゐるしく

花
源氏君は心ま事ゆくよしみ給つり
姉君とよくろしめるよ小君か右
よろしうこゝつさく　秋月く
ゆとりふらりて
けとみのんとしてるかいくしひとこの
ん心よふやし源とこひまうかしう
かひらまし又所か貞女く
いせたのねまのたれかれてやかしかりつし
あそのかした

くはしや伊勢をのあまれぬ嶋も衣をは
あれたりし人やみえつらし
さくら山は跡おのあまのそて衣をか
きりうし人やみえつらし
されは後撰に伊勢物語ノ女のもとに
うぬとしおてしりふはつかひして
とありつ
くれしやいせ衣のあまのすね叶
雪り

思ひみたれぬり
くれ蛙の心中く
わしの君と
萩や
人しらす人をたにおもふ事かれは
梶しう人しらす人をたに思ひと涙されは
何人とりししつゝか
松立羽いかりそれ不ん
小君のまつりのあさくに

秘
わくの萩乃へんくに示して源氏を
しつまゐへよしらうとせ
ゆしるとかれと思ふへし
かるましし思ふ
萩乃中へ
これらかんよ
秘
菊子ノ池へ
かまくらんしう源の御書かまと
と結かるへし

はまかれ人を
秘
空蝉へ
かるくにともしぬ
源ノうゐとけせらへかるましぬとお
りふへ
作
かうくしれらんえかるくらかしぬに
かるしんくらかしぬんへ川平二
前栽くす及ぶし
わらしらの歌ありしいとうへと

物かくしにも

奥入
ありくらぬや世中といひける

しかしこの命と思ひて

秘
空蝉の心中始終此哥の心あり我身

しらすなるぬ身にてあるかしいと

かりそめ貞節の心かくしてあり

くるしき身のかしこまて

これはいまたしらぬ

あさ源ノ氏蜻蛉ノ身とよそへてよめる

いつしかよにかうきてへてある

かゝりぬよ

しるしかしかれし

右哥空蝉
うつせみの羽にをく露のこかくれて

しのひしのひにぬるゝ袖かな

秘
義かし此哥後撰集ノ哥く伊勢に

くはしくはしるされたり

此哥後撰集にありしれ抄

古今かきし後撰物語あとりしめ

てよみしを然るよしにて万葉哥ニ何
まとめりけるに山上けさくらがもとの
哥なく又まゝくよ露そとしけは
西海乃川の哥乃下句と赤人哥よ
これゆゑへかうくらす夜はひこ星のと
渡る舟のかい乃ちつくられ哥一同や
混義抄にも云るは物のめかしく人乃何
まゝ何となく見つくれぬしく数かぬ乃
いこれと古今乃歌しらみ乃哥より

大文字乃かはらしと又は物語乃こ
みしとりかわうしと一段の哥を
上句亦文世御ノ集ニ有りし乃
しらすの例あとてもそみへしらて
義曰は哥全篇 俊頼集ニ有り
河海よ将ヽノ事見ゆとくうつらす
義ノ義さハ定蜂の贈答よはのらと
俊頼集ノ古哥としくは将わ趣し
しれとれゆゑ紙乃らしに書

よへとはかりちきりし 深意あり
伊勢は来まくれと露もぬまもと
まてぬよこよこ猶かりけんはかる
蜻乃こゝろには我身思ふらく
扨て通すしぬと来まくれと定
てられゆくへし人しまらん程と
ぬるらんとく
九禅抄 前書之 伊勢物語より
みちのくの思ふかりちきり維ゆくよ

かこひ人乃哥乃執かりし何楽

国立公文書館
National Archives of Japan

昌平坂學問所

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan